風姿花伝第一、

年来稽古条々

十七八より

この頃は又、余りの大事にて、稽古多からず。先、声変わりぬれば、第一の花失せたり。体も腰高になれば、懸かり失せて、過し比の、声も盛りに、花やかに、易かりし時分の移りに、手

〔口訳〕此の時代は、又、あまりに重大な時期で、稽古に於ても多きを望むべき時ではない。先づ変声期であるから、子供時代の美しい声の花は失せてゐる。又、体格も腰高になるから、児時代のやさしい風情はなくなり、以前の時代の、声も盛りで姿も花やかに、演じ易かつた時代に比べて、やるべき手立が全然かはつてしまふので、当人は全く意気沮喪してしまふのである。で、結局、観客の方に於ても、滑稽に感じて居るらしい様子が見えて来ると、恥しさといひ、その他何やかやで、此の処

立はたと変はりぬれば、気を失ふ。結局、見物衆もをかしげなり気色見えぬれば、恥づかしさと申、彼是、此所にて退屈する也。此頃の稽古には、唯、指をさして人に笑わるゝとも、

で大ていへこたれてしまふものだ。此の時代の稽古としては、たとひ人から指ざしして笑はれても、そんな事に頓着せず、内に於ては、自分の声の出し得る限度の調子で、宵・暁の稽古をはげみ、心中には大願をおこして、自分一生涯の成功不成功の堺は今にあるのだと覚悟して、今後一生涯の事を考へ、どこまでも能を捨てずにかじりつく、より以外に稽古のやり方はないのである。此の際に捨ててしまつては、能はそのまま上達を止めてしまふ。一体に、如何なる調子でやるかは、その人

それをば帰り見ず、内にては、声の届かん調子にて、夜暁の声を用ひ、心中には願力を起こして、一期の堺今なりと、生涯に懸けて、能を捨てぬより外は、稽古あるべからず。此所にて捨

個々の声によつてきまるものだが、大体から見て、黄鐘・鸞鏡あたりまでの調子を用ひるがよい。調子といふことにあまり拘はつて、出ない声を無理に出したりなどすると、身なりに悪い癖が出るものであるし、又、さやうな無理をすると、声も後年になつてからいけなくなるものである。

てれば、そのまゝ能は止まるべし。惣じて、調子は声に因ると雖も、黄鐘・鸞鏡迄を用ふべし。調子にさのみかゝれば、身形に癖出くる者也、又、声も年により損ずる相なり。

〔評〕

この段は、修業途中の危険期についての訓戒である。生理的変化であるから、何人も免れない運命であるが、今までの賞讃の声が失せ、見物から笑はれるといふことは、感じ易い青年には相当の打撃であつて、芸の興味も失せ、つい打捨ててしまひ度くなるのは自然である。しかし、ここが一生の浮沈の分れ目であると思へば、それを堪へるより外に方法はない。その方法として示されたものは、無理せぬ範囲の音程で練習をはげむこと、願力を起して能を捨てぬことが眼目である。従つて「稽

古多からず」といふのは、その意味で解すべきであらう。多曲多芸は、この時代に望むべき事ではない。それより以上の重大事がある時であるから。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈　上巻』能勢朝次　著